

# 水城築造一三五〇年

『日本書紀』天智天皇二年(六六四)条  
是歳、……筑紫に、大堤を築きて水  
を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。

白村江の戦い(六六三年)に敗れ、  
防衛策として水城を築いたとする記事  
です。水城は昨年、この築造から数え  
て一三五〇年目を迎えました。同じく  
防衛施設として築かれた大野城や基肄  
城とともに記念事業が、福岡県内で催  
されています(水城・大野城・基肄城  
一三五〇年事業ホームページhttp://  
www.mok1350.org/)。

水城は大宰府政庁から博多湾へ行く  
ルートのうち、もつとも平野が狭くな  
る場所を遮るように築かれた土塁です。  
全長が約一、二キロメートルあり、外  
濠と内濠とがもうけられ、東西には門  
もあつたことが発掘調査によつてわかっ  
ています。

『万葉集』にはこの水城で詠まれた  
歌が残されています。それは天平二年  
(七三〇)十二月に大宰帥であつた大

伴旅人が都へ戻るときに、  
児島という女性と交わし  
た一連の贈答歌です(巻  
六の九六五〜九六八)。

九六六番歌の左注に「こ  
の日馬を水城に駐めて、  
府家を顧み望む。時に卿  
を送る府吏の中に、遊行  
女婦あり。その字を児島  
と曰ふ。」(この日馬を水  
城にとめて大宰府の家を  
顧りみた。時に卿を送る  
役人の中に遊女がいて、  
その名を児島といつた。)  
とありますので、水城が  
一種の境界として認識されていたと考  
えられます。

このときの心境を、旅人はつぎのよ  
うに詠んでいます。  
大夫と思へるわれや水莖の水城の上に  
涙拭はむ

りっぱな男子だと思ふ私は、水莖  
の水城の上で涙を拭こうか。

昨年、水城の土塁断面の発掘調査が  
(巻六一九六八)



太宰府市の水城跡

行われ、冒頭の記  
念事業と関連して  
その成果が公開さ  
れました。土塁の  
断面調査がなされ  
たのは、大正二年  
(一九一三)に黒  
板勝美氏や中山平  
次郎氏が行つた断  
面観察が唯一で、  
じつに約一〇〇年  
ぶりのこととなり  
ました。この調査  
によつて解明され  
たのは土塁の築造  
技術です。博多湾側は急こう配に、大  
宰府側は緩やかな傾斜になるよう意図  
されていたことや、粘質土と川砂とを  
交互に版築させていたことなどがわか  
り、当時の技術力の高さが証明されま  
した。水城については貯水機能など未  
解明の部分も残されていますが、一三  
五〇年目にして天智朝の水城にまた一  
歩近づけたことは喜ばしいですね。  
(万葉文化館主任研究員・小倉久美子)